

「平成 26 年度 みんなく 若手研究者奨励セミナー」〔於：国立民族学博物館（2014/11/26-28）〕

発表者：荒木 亮（首都大学東京大学院）〔セッション 1：11 月 26 日、15:00~15:50〕

スカーフ着用の言説からみる「イスラーム的なるもの」と「自律的な信仰」

荒木 亮（首都大学東京大学院／日本学術振興会特別研究員[DC1]）

【発表要旨】

本発表は、再帰的近代[A・ギデンズほか 1997]の産物である「イスラームのオブジェクト化」[D F. Eickelman and J Piscatori 1996]——より一般的にいえば「文化の客体化」[cf. 太田 1993; 1998: 前川 2004]——に起因する文化（宗教）の再考・再解釈をめぐる問題について、2014 年の夏にインドネシアのメディアを賑わした「ジルブップ」言説を事例として検討をすすめるものである。

近現代社会において自文化を（再）創造する動きは、人類学では「文化の客体化」として論じてきたのだが、そこでは文化を再創造するにあたっての人々の戦略や文化に対する主体の「操作性」およびこれらのアイデンティティ・ポリティクスに着目してきた。ただし、文化（宗教）の再考に対する主体の戦略や主体の「操作性」を強調しすぎるべきではないだろう。「イスラームのオブジェクト化」という概念を念頭に置きつつ、大塚和夫は客体化されたモノ（宗教）による人々への拘束性が見落とされることを危惧する[大塚 2000: 161-164]。すなわち、クルアーンの無謬性を前提とした主体（ムスリム）によって行われる以上、そこには教義への「操作性」と教義による「拘束性」とが混在しているといえよう。したがって、文化が操作可能な対象と捉えられる一方で、人々に宗教的規範を埋め込むような文化的枠組みが客体化／オブジェクト化される場合、逆にモノ化された、物象化された対象が人々を外部から拘束するという側面も鑑みる必要がある。

近現代社会を生きるムスリムとは、イスラームに対する個々人の理解や解釈に開かれている一方で、「イスラーム的なるもの」／「社会的なるもの」によって拘束されるという側面も指摘できる。このようなイスラームに対する主体の「操作性」と主体への「拘束性」とが錯綜する状況を検討するにあたって、本発表ではインドネシアにおける「ジルブップ」言説を事例として取り上げる。

「ジルブップ (jilboobs)」とは、ムスリム女性（ムスリマ）が頭髪や顔を覆うために着用すべきとされる布（スカーフ／ヴェール）を指す「ジルバップ(jilbab)」からの造語〔語尾の「bab」をもじって、「boobs」＝「おっぱい」という意味の英語に付け替えている〕で、ジルバップを着用しながらも、同時に身体の輪郭やバストを強調するような服装のムスリマを指して揶揄する言葉である。この背景には、ジルバップやイスラーム服の着用が、信仰心の証というよりは世俗的な動機やお洒落のトレンド、ファッション性や商業性を重視したいわば消費文化的側面を伴って浸透してきたこと、それに対して「イスラーム的」視点から議論の対象とされてきたことが挙げられる。

「シルブップ (jilboobs)」とされる服装のムスリマに対して、現地では「イスラームから外れたもの (keluar dari Islam)」表現する。ただし、じっさいの人々の語りでは、必ずしも「ジルブップ」とされる服装を批判するものばかりではない。そこで本発表では、まず「ジルブップ」に関するメディアの報道を分析することで、それが社会的言説（ラベリング）という位相で論じられるときには、いわば純粹化・本質化されたイスラーム像として表出される側面があることを指摘する。次に、人々よる語りを目を向けることで、日常的な生活実践では、必ずしも固定化されないムスリマ個々人の自律的なイスラーム理解があることを明らかにする。最後に、社会的な言説（メディア）と人々の語りとを対比的に検討することで、いわば理念と実践によって紡ぎ出される宗教のあり方が、（他者化や本質化の帰結としての）「排除」や（多様性への寛容さといった）「包摂」を孕みつつ形成・生成・再構成されていくというその一断片を析出したい。